

上に登場する。これらの集團は、黃巢の亂中に李克用を中心とする沙陀勢力に吸収され、この結果、沙陀勢力が大いに伸張したと推測される。ただ、ソグド系突厥の集團としての消息は、列傳に見える個人的情報を除くと、編纂史料からはうかがえなかった。ところが近年公刊された石刻史料により、十世紀初頭において「索葛部」や「鷄田部」という集團が河東地域北部に存在していたことが明らかとなり、後晉時期にいたるまで沙陀勢力の軍事的根幹を構成していたと考えられるのである。

南宋における湖北會子の展開

金子泰晴

湖北會子とは、南宋第二代孝宗初年である隆興元年（西暦一一六三）に、湖廣總領〔長江中流に駐屯する軍隊への補給機關〕の王玨がはじめて發行し、湖北路・京西路一帯〔現在の湖北省附近〕で流通させ、鄂州〔現在の武漢〕において兌換を行った紙幣である。この湖北會子は、流通地域が南宋經濟の中心である長江下流から離れていたこと、全国的に流通したとされる行在會子に比べて發行規模が小さいこと、それに比例して殘存史料が少ないこともあつて、從來あまり研究の對象とされてこなかった。

私は以前、湖北會子發行の経緯について、南宋の長江中流における兵糧補給體制整備の觀點と、南宋における地域流通圏の觀點から検討を加えたが、なお部分的なものに止まった。

そこで今回の發表では、湖北會子發行の政治的背景について検討すると共に、湖北會子のその後の展開、特に南宋中期における湖北會子の發行過剰に伴う湖北會子の回收、行在會子發行の動きを検討し、長江中流の補給體制に關する南宋政權の政策を論じてい。

余懷と冒襄

——清初江南遺民の「風流餘韻」をめぐる——

大木 康

冒襄（一六一一—一六九三）と余懷（一六一七—一六九六）どちらも明末の南京に若き日を過ごした経験を持ち、明の滅亡の後には清に仕えず、遺民としての生涯を貫いた人々である。そして片や余懷は南京秦淮の様子を克明に描き出した記録『板橋雜記』を著し、片や冒襄はもと秦淮の妓女であり、後に側室となった董小宛の思い出をつづった『影梅庵憶語』を著している。韓英は冒襄の墓誌銘（『潛孝先生冒徵君襄墓誌銘』）において、「冒襄が亡くなったことにより、東南故老遺民の風流の餘韻は絶えてしまった」と記している。一口に遺民といっても、その生き方にはさまざまなスタイルがあつたわけだが、この二人は、たしかに「風流遺民」とでも呼ぶことができる、清初期の文人の一つのタイプを代表しているといえよう。

錢謙益と柳如是、龔鼎孳と顧媚などの關係を擧げるまでもなく、

明末清初には、文人と妓女との親密な交流が見られた。その意味では、冒襄、余懷の二人は、明末風流文人たちの繼承者たるに過ぎない。しかしながら、明清の鼎革を経ることによって、明末の女性たちは、輝かしき明の世の象徴としての意味をも負うようになった。本報告では、冒襄と余懷の交遊、『影梅庵憶語』の流通と讀者の反應などの材料をもとに、清初「東南故老遺民」にとつての「風流餘韻」の意味をさぐってみることにしたい。

クブラウィーヤの「成立」

矢 島 洋 一

タリーカを單純にスーフィー教團と捉える理解は現在修正されつつある。しかし、タリーカとは何か、具體的には、一つのタリーカの範圍はどこまでか、スーフィーがあるタリーカに歸屬するということは如何なる意味を持つのか、何をもつて一つのタリーカの成立と見なすことができるのか、といったタリーカの存在形態を巡る基本的な問題についての共通認識は未だ確立されていない。タリーカはイスラーム世界史において重要な役割を擔ってきたと言われるが、その機能面を理解するためには形態面の理解が不可欠の前提である。

そこで本報告では、一三世紀に中央アジアのスーフィー、ナジュムッディーン・クブラーによって創設されたとされるクブラウィーヤを例に、タリーカの「成立」の意味について検討する。特

に一三・一四世紀における初期クブラウィーヤのスーフィーたちの著作や活動の分析によって、クブラウィーヤの道統、教義、人的組織、歸屬意識、他者の認識の各側面におけるクブラウィーヤの「成立」の意味を検討し、それらを總合することでタリーカの存在形態を理解するためのモデルを提示したい。

イスラム化に伴う暦・交易・巡禮儀禮の變遷

——七世紀のアラブ社會——

醫 王 秀 行

預言者ムハンマドがメッカを征服(A. H. 8)し、別離の巡禮(A. H. 10)を終えるまでのごく短い期間に、その後のイスラム社會のあり方を決定づける規定が數多く作られた。暦、巡禮儀式、そして巡禮時における交易のあり方も一變した。

暦は従来の太陰太陽暦から純粹な太陰暦へと改變され、これによってアラビア半島の巡禮システムは一變し、メッカのみが巡禮地としての機能を持つことになった。神聖月の規定も改められ、多神教徒に神聖月の禁忌は適用されなくなった。イスラム化が進行する中、部族檜の秩序を支えていた神聖月の持つ意味も歴史的に變化した。

ハッジはもともメッカへの巡禮ではなく、ヒジャーズ地域の部族集團が主催した、メッカ東方の谷間における祭禮であつた。メッカのクライシュ族はこれに参加する一部族にすぎなかったが、